

中央高原の夏

小牧實繁

長尾さんと小池さんとは數日前、ド・モランジエ家の人々と共に出發されたのであるが、自分は英吉利旅行が延びて十二日にしか巴里へは歸れず、旅行の後始末をしたり山へ出發の準備をしたりして居る中に早や十五日となつて仕舞つた。昭和三年八月である。

六時半夕食、七時半巴里の宿を出てタクシーで停車場に至る。伊藤猷典氏が驛まで見送つて下さる。ニー嬢が姉のマルセル嬢に見送られて驛に着く。自分は此の娘さんと一所に長尾さん達の行つて居られるモランジエ家の避暑地へ行くことになつて居たのである。一つには佛蘭西語の稽古を續けるために、一つには中央高原火山地方の自然と人文現象を眼のあたり見るために。八時半汽車は伊藤氏とマルセル嬢とに送

られる我等兩人を乗せて南に向つて出發した。寢臺を取る程の贅澤な旅ではないが、がら／＼に空いて居て充分睡眠はとれた。

八月十六日、木曜日、晴。六時頃眼が覺める列車は餘り景色の開けた所は通らない。そして七時十三分モニストロール (Monistrol d' Allier) 標高五九〇米と云ふ淋しい田舎の驛に着く。降りる人も殆んど無い位である。

我等を迎へる爲めに長尾さんが坂を走つて降りて來られるのが見える。佛蘭西語の御師匠さん、その御母さん、妹メリー嬢などが迎へに降りて來られた。御母さんの妹、その友達と云ふ太つた御婆さん等は初對面の人達である。御師匠さんが白い正ちゃん帽を被て居られるのには驚いた。

皆んな朝食前であつたので驛前のレストランで食事を共にする。不味い田舎式のパンと不味い珈琲の大きな田舎茶碗に容れられたものとである。田舎に來たんだなと思ふ。そして十時迄閑談する。日本語で話して御母さんの妹さんから叱られた。

自動車でサン・プリヴ^ア (St. Privat d'Allier) (標高八七五米) に上る。道は思つたよりもうら道であつばかりでなく、遙かに下の方には美しく蛇行する嵌入河川が見下される。中々いい景色である。

やかで暫らくの宿と定められた一軒の田舎旅館に着く。そして腹を損ねて休養して居た小池さんに會ふ。宿のおかみはマダム・シャンボンと云ひでつぷり肥つた人の善さ相な中年の婦人で、ビエールと云ふ漸く歩きかけたばかりの男の兒が此の上もなく可愛ゆい。正午まで眠る。此の宿が到底も氣に入つた。先づ第一に家構の入口から向つて左側に廣い土間があり其處が牛小屋になつて居ることである。そして宿の主

人と云ふのは全く日本の田舎の百姓を見るのと異る所のない一個の好々爺で、せつせと牛の掃除をしたりなど百姓らしく働いて居るのである。入口の向つて右側の大きな室には極く簡単な木製の卓と椅子が並べられて居てバーの様になつて居るが、その裏手の室が食堂であり、稍食堂らしく、そしてそこから見た窓外の景色が又氣に入つた。所謂絶景と云はれる景色ではないが繪になる風景である。可なり深い一小支谷の谷頭を隔てて、更に向ふの谷との間に臺地の尾根が突出て其處に村の御寺と、學校に利用せられる古い城の建物とが見える。唯それ丈けの景色ではあるが、古い淋しい然し平和な高原の村の姿が此處に結晶して居る様な氣がするのである。

中食をする。矢張り田舎料理で、巴里の美食を味ふ様な譯には行かぬ。然し其處に一種の野趣がある。それを食ふんだ。近所の獵師が撃つて來た山鳩の種類を手料理で食べさせて呉れたのは此所の御神である。料理を運んで來る宿の

小娘だつて白粉一つ着けては居ない。それを不味い赤葡萄酒で食べるのであるが、誠に氣樂で田舎の味がしみじみと味はれる。

宿を出た所に一寸した廣場がある。其處に二三人の御婆さん達がレース(*dentelle*)を編んで居る。巴里まで行けば手製のダンテルとして非常に珍重せられるものであるが、此の地方の御婆さん達は之れを暇にあかせて根氣よく而も手先上手に編むのである。氣樂な世間話などしながら。

話しかけて見る。發音は巴里人とは大分違ふ概して音が強い。然し解るには解る。嘗て來た日本人はウィ・ノンしか云へなかつたのに御前は自分達の話することが解るのかなど他愛もない事を云ふ。

少し離れて飲水の出る所がある。谿間の水を引いて居るのだと云ふ。石の水槽に受けて居る部落の人達は皆んな此所から飲水を得る。此れと廣場とが此の小部落の中心なのである。

此の泉の筋向ひに一軒の肉屋さんがある。牛

を天井から吊して置いて皮を脱ぐのであるがその手際と云つたらない、到底もあざやかなものである。流石は家畜の國だと思はれるが、何だか石器時代にでも立歸つた様な氣がする。

此の家が宿屋とレストランとを兼業して居るが、二人の可愛い、年頃の娘が居て我々が通る度に半ばからかふ様に可愛い愛想笑ひする。そして何だか早口に云つて笑つて居る。大方我々が此の家に泊つてやればよかつたのであらう。ここの所を右に折れると御寺の方へ通じる。到底も家畜の糞が多くて如何にも不潔らしく感ぜられる圖子である。然しながらこれこそ今自分等が牧畜の本場へ來たことを痛感させる著明な風景なのである。

此の道を右へ曲らないで眞直ぐに本通りを行くと左側に一軒の木靴屋(*sabotier*)がある。日本で言へば村の下駄屋に當る譯であるが、木履とは珍らしい。尤も巴里でも木靴を穿いた労働者風の男や、時には女もが屢々見受けられるが。色々の型の木靴を並べて居る。

それから二三軒行つた所の同じ左側に又一軒の宿屋兼レストランがあり、ド・モランジェ家は此の家の一部を夏場だけ借りて居るのである。

御師匠さんに誘はれ長尾さん小池さん等と一緒に、此の家の前の石垣を降り小徑を傳つてアリエー河畔に行き釣をして遊ぶ。日本ででもする様に谷川の石に附着した蜷を餌にして釣るのである。淋し過ぎる位の谿間の仙境である。

夕方宿に歸り、夕食後又た先生の家に遊び蓄音機を聴いたりして宵を過す。

八月十七日、金曜日、晴。水入れで運ばれた水と金盥とで手水を使ふ。舊式な英吉利の家庭ならば倫敦でも此の通りであるから、別に珍らしくも思はない。

がらん／＼と云ふ何とも云へぬ柔かい鈴の音が聞えるので二階の鐵窓を開けて見ると牛が通る。日本の裾野の町へでも來た感じである。

朝食は矢張昨日の朝の様である。不味いパンと珈琲と然し美味い牛乳とである。パンの不味いのは閉口だが又變つて居ていい。便所が變つ

て居る。勿論巴里で見る様な水洗式のものなどでは有り得ないことは決つて居るが、然し想像とは全く違ふ。疊半帖位のたたきの真中に幅の廣くない深さの深くない。圓筒形の糞壺があつて新聞紙位が置いてある。そして毎日之れを汲み出して肥料に使ふらしい。

佛蘭西語の稽古のために先生の家へ行く。庭には木製の骨組に藁繩を張つた簡單な安樂椅子がある。野趣愛すべきものである。暫らくその上で休んで居ると先生が出て來て、野外でやうと云はれる。谿川(Je Rouchoux)の橋を越えた向ふ側の小徑の傍に腰を下して本を讀む。昨夜書いて置いた作文を直して貰つたりする。野外のことだから規定の一時間より長くなるのは自然で有益である。氣樂な然し淋しい林間學校である。

渴を覺えたので村に上り食前の酒を飲んで宿に歸る。渴と云へば此處は巴里よりも更に乾燥して居る様である。日射は可なり強く世は全くの夏であるが坂道を上下しても殆んど汗は出な

いのである。唯のどがかわく。

午後は劔橋の學生が着て居た、粗い赤黄緑など原色の豎縞の上衣に白のズボンと云ふ運動着で河へ泳ぎに行く。村の人達は驚きの眼を睜つたのである。田舎ではこれでも中々シツクな人であらう。ベレー帽や褐色の襟飾などは珍らしくないにしても。

三時には持參のパン、ソーシッソン、シヨコラ等を攝る。土産の腸詰とチヨコレートとは中々馬鹿にならぬ。チヨコレートには乳を混じなすのであるが、この方が遙かに美味なんである。斯くて泳ぎと釣りと會話とに日は早くも傾いた。身體はぐん／＼とよくなる様な氣がして宿に歸る。不味い料理ながら夕食も進む。

夜は又遅くまでモランジェ家の人達と閑談して過す。言葉も段々上達するのが自分にも氣着く。

八月十八日、土曜日、晴。ブーデニオン氏の自動車に儲ひ山を越え川を渡つてアレイラス(Alleyras) へびより寒村へ遠足する。此所は河

が割合に廣く水が靜かで泳ぎには持つて來いである。半日泳いで暮す。此の自動車と云ふのはブーデニオン氏が雞卵の買ひ出し、モニストロル驛着荷物の運搬に使用するカミヨンの中に臨時の椅子や敷物をしつらへたもので茶氣があつて振つてゐる。夕方宿に歸る。

八月十九日、日曜日、晴。日曜日だからとてモニストロルで中食し、食後自動車でオンプレーの城を訪れる。此の城は古くモランジェ家の先祖の築いたもので、革命後人手に渡つて居たのを數年前一族のギー(Guy de Morangès)が買ひ取り平生は元郵便局長を勤めたギー氏の父先生達の叔父さん夫妻が此處に引退生活を送り夏になるとギー氏夫妻等が避暑に來るのである。叔父さん夫婦、ギー氏夫人、ギー氏令妹等に紹介せられて半日清遊する。

城は石造で四角形であるがその二階三階から眺めた中央高原の見はらはしは又格別である。別に何の奇もないが、大地は波打ちながら而し平坦に遙か遠方まで續き、そして所々に、此の城

の様は何々の城、何々の城と云はれるものが點々と望まれる。

爐邊に行つて見る。十四世紀モランジエ家築造と云ふ由緒がその石枠に刻せられて居る。

燭をとつて穴倉に入る。全く化物でも出相な凄い所で、じんめりと濕つて居る。今は良質の葡萄酒やその他の飲料水や食料品などを保存するのに使はれて居る。

宅地内には小さいながらもチャペルが在り、それには懺悔臺などもちやんと設けられて居り、又それと少し離れた所には昔の馬車置場なども残つて居る。ありし日の中央高原上の大小名の生活を偲びながら、又自分自らその殿様になつた様な氣分で悠々と屋敷内を散歩する。音樂好きなそして活潑な稍面長のギー氏の妹さんは特に此所の場面としつくり調和して居る様に思へてならなかつた。

出来ることなら一晚城の中で泊めて貰ひ度かつたのであるが皆んなその用意もなく、御茶や酒を戴いて夕方歸る。何れかと云へば岩のごろ

くした瘦せた土地ではあるが松の蔭などのある平和な而も淋しいオンブレーの景色は永く忘れることが出来なう。

八月廿日、月曜日、晴。大岩 (Roche Grange) と呼ばれる景色のよい所から、ル・シェー (Le Chier) と云ふ村の邊を散歩する。ル・シェーから川下の方の高原を眺めた景色は又とてもいい。平凡と云へば平凡であるが、平凡の中に本當の高原の特色が見られるのである。緩かな傾斜の山の端が遠い遠い地平線に續く。日の入りが誠に美しい。

散歩からの歸るさ、徒歩でル・ピュイまで行く有志はないかとの先生の提言に、よろしいと請合つて仕舞ふ。

八月二十一日、火曜日、晴。徒歩ル・ピュイに行く。サン・ブリヴァを出て暫らくしてからル・ピュイに着く少し手前までは殆んど平坦な高原上の大道である。苦しい道ではないが、暑いのと長いのとで樂ではない。途中で罐詰の果物を出して野天で食つたり、ビュフェーで飲物を飲

んだりにして行く中に漸くル・ビュイが見えた。高原の平坦面から一段低い盆地の中の美しい都會である。サン・ミシエル、ノートル・ダムを戴くモナドノックとポリニャックの城とが先づ眼を引く。

グラントテルと云ふ旅館で中食し、がっかりして靜かに休む。少しばかりの買物などして還りは自働車で歸る。長尾さん小池さん、モランジェ家の人達が途中まで迎へに來て下さつた。愉快な一日であつた。

八月二十二日、水曜日、晴。ブーデニョン氏の荷物自動車でブーシ湖 (Lac du Bouchet) (標高二二〇八米) へ行く。中央高原に於ける一つの火口湖である。周回三軒、深さ三二米。水泳着を借りて泳いで見たが到底も冷くて長くは漬つて居れない。二本の橈を着けた和船型のボートを漕ぐ。湖心の邊では渦流があつて危険だと云はれる。陸に上つて湖水館 (Hôtel du Lac) と云ふのでおやつを食べ茶店の自働樂器で村のおかみさん等と踊る。要するに此處は淋しい田舎らしい避暑地であるが、その淋しい靜かな氣はひが氣に入つた。殊に湖水を繞る美しい天然の松柏林の静けさよ。

八月二十八日、火曜日、晴。長尾さん小池さん御師匠さんニー嬢と五人でル・ビュイへ行く。今日は自動車だから早くに着く。先づモリス (Morris) と云ふ旅館で中食をとり腹をこしらへる。地方有力者の宴會がある。料理が洋式料理だから少しは違ふが、日本の田舎の料理屋の宴會を思はせる。

食後サン・ミシエル、ノートル・ダムの御寺に詣り、又たポリニャック (Polignac) の古城址を訪れる。サン・ミシエル、ノートル・ダムの門前町には多くの婆さん達がせつせとダンテル編みに餘念がない。佛蘭西中での名物の一つだと云ふ。此の地は又紫水晶・瑪瑙細工その他の寶石類が名物で瑪瑙細工は殊に美しい。つひ記念にとて買つて見度くなる。ポリニャックの城は殆んど廢墟のままで蔦かづらの生ひ茂るに委せて居る。

町の中で買物をする。廣場の市場が殊に珍らしく眺められた。色々なものが賣られて居るが主としては青物野菜類である。

散髪をさせたり、明日オンブレ行の御土産を買つたり、書物を買つたり、廣場の傍のキャフィーでポルトーを飲んだりして自動車でサン・ブリヴァに歸る。

八月二十九日、水曜日。連日の暑さ中りか長尾さんが腸を損ねて閉口の態である。然し大したこともないと云ふので豫定通りオンブレ行きを決行する。餘りギー氏に迷惑を掛けてもと云ふ心使ひから食糧品持參である。

先づモニストロールまでは一同徒歩で降る。それからブーデニョン氏の荷物自動車に備ふこととなつたが、一番元氣な自分は乗合自動車で行し途中車を棄てて徒歩オンブレに行くと言ひ出した先生の同行者となる。

此の田舎の山奥にも矢張り水力發電用の堰堤を見出す。景色は大して變つたことはない。オンブレへの間道である丈けに道は良い方では

ない。所々迷ひ相な道である。大急ぎで自動車に負けまいとして山腹を駆け登つた所がオンブレであつた。山腹など殆んど何にも利用せられて居ない。僅かに土地の者が薪を採る位のものであるらしい。

松林を出て本道から曾遊のオンブレの古城に着く。叔父様が兩人を迎へて下さつた。自動車は着いたかと云へば未だだと云ふ。扱は徒歩の我々が速かつたのかと愉快である。

持參の食糧やギー・ド・モランジェ家の御馳走やで中食をとりシャンパンを饗せられ蓄音器でどる。城からの景色は何時見ても快い。

夕方サン・ブリヴァに歸り、秀坊の誕生日に就き心ばかりの御馳走をする。

八月三十一日、金曜日、晴。先生の妹に當るギー夫人、ニニー嬢、先生、小池さん等と五人で程遠からぬメルケール (Mercoeur) の村に散歩する。取立てて云ふ程變つた所ではないが何と云ふ調和した風景であらう。穩かに傾斜する丘の斜面から谷川の岸に至るまで美しく一帯

に耕された耕地、川の對岸の割合に傾斜の急な

林、それを越えた向ふの高畑、それが小山の裾まで續く柔かい調和した平和な風景、平凡と云へば平凡な田舎の風景に過ぎぬが、風土を異にした日本などでは何處にでも見られると云ふ風景でもない。完全な調和そのものである。そして何と平和な村の姿であらう。野心も妄念も憂へも悲しみも此の世の惡しきものは何物も無さ相である。村人は肥えたらぬが狭からぬ耕地を耕し心荒からぬ牛を飼ひ、味よき乳、手製のパン滋味豊かな牛酪、腸詰、雞卵、野菜と云つたものに鼓腹して居るのであらう。野趣豊かな石造の家屋、素朴そのものの椅子、卓、簡易な家具、むさ苦しからぬ厩の家畜、簡單な農具類、不思議に遊子の心は引かれるのである。何と云ふ静けさ、何と云ふ平和であらう。土俗品としては新しからぬ珈琲挽きが興味深く眺められた。村全體が又繪である。木のあるべき所にはちやんと木がある。落ついたゆかしい村である。

長尾さん、おかあさん等が迎ひに來られて共

にサン・ブリヴァに歸る。

九月一日、土曜日、晴。午后早々アリエー河へ泳ぎに降りる。小池さんは河で佛蘭西語の稽古を受けることにして、所が途中で珍らしや夕立と來た。皆んな洞窟の中に避難して小池さんは其處で稽古を受けることとなる。

火山岩(玄武岩)中の洞窟で横十數米、奥行はそれよりも更に長く、高さも數米はある。何か石器時代の遺物でも出ないかと土をいぢくるが道具が無くては掘れもせず詮方もない。元來自然の洞窟ではあるが人工が加はつて居ることも確かである。セルト時代の遺跡と考へられて居る。こんな洞窟が此の地方には一つならずある。やがて驟雨も去り、何時もの如くアリエーに降り泳ぎ樂しむ。

九月二日、日曜日、晴。外の氣はひが常になく賑かである。日曜日で御寺參りの人々が集まつたのである。皆んな、男も女も、黒装束である。誠に小綺麗できちんとした服裝をして居る。恐らく此れが村人達の一帳羅なんであらう。去

る八月十九日、サン・ブリヴァに於ける最初の日曜日には自分も御寺参りをして見た。朝食もせず早朝、大きくはないが新らしくはないロマン風の此の村の御寺に行つて見ると殆んど立錫の餘地もない位に善男善女は集つて居たのであつた。そして御勤めが終つて水盤の所で十字を切つて出て来る人士は多くは村のビュフェに集つて長い閑談に花を咲かせて行くのであつた。今日も又それだ。婦人達も今日は髪をきちんと結び晴れの髪飾りを着け、頸から胸へ掛けた十字飾りも整つて居る。黒装束が殊に慎まじやかに見える。男も黒服に黒靴でズボンの筋目も正しい。そして廣場のあちこち、又村のビュフェで一杯傾けながら愉快に話し合つて居る。恐らく一週一度の此の集ひが村の各部落人間の楽しい交歡、必要な用談の楔機ともなるのであらう。我等のグループでも今日は日曜日だからと云ふのでモランジェ家で御馳走の饗應がある。何かにつけて不便な此の田舎のこと故そう美味珍肴の出来る譯はないが、心盡しの品々だらうと

その親切を味はふこととする。屋外の食事として中々氣持がよい。食前のポルト酒の味は何時もながら又格別である。そこへメリー嬢が料理の名手と來て居る。宿の田舎料理より美味いは自然である。唯先生が今日は暑さ中りか氣分のはつきりせぬのが残念である。

食後先生の病氣を見舞ひ、その後バリエー夫人 (Barbier) の所で蓄音器をかけて蹈る。

九月四日、火曜日、晴。夕方サン・ブリヴァでプラトー (Plateau) と呼ばれる平な高臺へ散歩する。高原の眺望がよく殊に夕日の入りが美しい。寒くなく暑くなく空は爽かに晴れて袖吹くそよ風も快い。全く詩的な所である。其處の民家が納屋が二階に造られ段の無い階段式の坂になつた陸橋で地面に通じて居るのが面白いと思はれた。

九月七日、金曜日、晴。乗合自動車でル・ビュイに至り、若干の買物をなし、驛前のテルミニウスで中食をとり、食後タクシーを傭つてロアー河上ラヴァート (Lavault) の古城を訪れる。此

れはポリニツクの様には古くなく建築の様式も新しい様であるが、實際堂々たる御城で、勿論オンブレーの城の如きはその大いさに於いて威嚴に於いてその足許へも寄れぬ。現在も舊領主何某公爵の所有で、此の殿様は現今でも莫大な富を擁して居ると云ふ。實際誰かが住つて居るらしく煙突からは煙が立上つて居る。ロアル河の上流に臨んで居るので殊に美しく、一寸凝つた近代式のホテルでも見る様な氣がする。又前の途をル・ビュイに歸る。ロアルに臨む峻しい崖の上は高原になつて居るらしく、崖に臨んで所々人家が見える。高原の平地を耕し、牛に草を食ませて生活して居るのであらう。飲料水は多分ロアルからかそれとも崖の中腹の湧水からでも得て居るか。ル・ビュイに歸り乗合の出るのを待つ。到底も乗客が多いので二臺出ることになる。人出の多いのは市の立つた關係らしい。廣場には若干の羊の群の蝨くのを見る市で買入れられたものであらう可なりの荷物も乗る。

九月八日、土曜日、晴。長尾さん小池さんは六日の日に巴里へ歸られた。それと入れ替りに先生の姉さんに當るマルセル嬢が今日モニストル驛に着くと云ふので早朝皆んなで驛まで迎へに行く。先月我々の着いた汽車で着く。先達とと同じ様に皆んなで朝食を共にする。

唯、今度は自分が病氣の番に當つて少々腹の工合が悪い。それに今朝は早起して疲れて居るので驛前ビュフォーの一室を借つて朝食後の睡眠をとる。所が何と云ふ罰か、顔や頸が痒痛くよく／＼と脹れ上つて来る。南京蟲に喰はれたらしい。此處に南京蟲が居ようとは思はなかつた。矢張田舎だと思ふ。尤も郵船春洋丸の一等船室にだつて此奴は居るのだから南京蟲は國際的存在なのかも知れぬが。兎に角泣き面に蜂の恰好である。グリセリン位つけても中々脹れは引かぬ。

モニストルで中食し、食後又たブージニョンの荷物自動車でオンブレーに行く。自動車は搖れるので却つて徒歩を思ひ、皆の止めるの

を聴かずに徒歩間道を採つてオンブレーに着く
辛かつたが愉快でオンブレーに着いた頃にはも
う腹の方は回腹して居た。皆よりも早く着いた
ので、他の連中が着く時刻を見はからひ押入に
隠れて脅かす。他愛もない悪戯者ではある。

今日はギー氏が來て居る。御やつの御馳走に
なり酒を振舞はれて皆んなで蹈る。

歸りにギー氏から城の繪端書を贈られ、又氏
が自家用の自動車で途中まで送られる。厚く謝
し強い握手を交して歸る。男らしい人であつた

九月九日、日曜日、晴。今日はサン・ブリヴァ
の御祭りである。廣場には朝から多くの露店が
出、玩具や菓子ややくざものの寶石類、裝飾品
と云つたものが村の子供や娘達を引着けて居る
ジプシーの回轉ぶらんこが自動音樂と共に切り
に回り、大人までが打興じて居る。樂器は賑か
に然し一種の哀調を帯びて引きりなしに奏せら
る今朝も先づそれで眼が覺めたのである。僅か
の金を出して乗るのであるが乗手は毎回満員で
ある。興行は決して損をしないだらう。それに

しても電車とも汽車とも解らぬ恐らく貨物車の
古手であらうと思はれる箱車に索引機を備へつ
けそれに商賣道具の一切家財器具の一式を積ん
でこんな田舎にまで入込んで來るジプシーの根
氣は偉いものである。

午後には御寺から坊さんや童子達の着飾つた
御練りの行列が出て村を一通りして岡の上の十
字架へ行く。持物と云ひ仰々しい嚴かな行列と
云ひ様子は全く同じではないが佛家の御練りや
神社の祭禮の行列と本質に於いて相通ずる分子
がある様な氣がする。

村のレストランと云ふレストラン・ビュフェと
云ふビュフェは何所もかしこも人で一杯である。
宿のお神も轉手古舞の有様である。私一人を守
つて居る譯には行かぬ。自分は氣を利かしモラ
ンジェ家の好意に甘へてその家で中食を戴くこ
ととする。そして回轉ぶらんこに乗つたり、射
的に興じたりして一日を過す。

中食も又たモランジェ家の厄介になる。あわ
ただしく夕食を濟ました頃早くもジョルジ少年

が花火をやり出した。それが濟むと皆んなで村外れの廣場へ仕掛花火を見に行く。此の村一年中での娛樂であるらしい。それが濟む頃から村の至る所で蹈りが初まる。自動樂器や蓄音器で村の青年男女が蹈る。風琴で蹈る古風な活潑なブルーの蹈りは珍らしいと思つた。我等も夜更くるまでバリエー夫人のサロンで蹈る。中央高原上の夏祭りの光景は先づざつとこんなものである。

九月十一日、火曜日、晴。先生、マルセル、メリー、ニニー嬢を誘つて、中央高原中の最高峯メザンク (Mézenec) に登る。

朝早くサンブリヴァを立ち、乗合自動車でル・ビュイに至り、それから自動車を備つて山麓の一寒村レズエスタール (Les Estalles) (標高一三四四米) まで行く。

既に爐邊の火が懐しい位の涼しさ否寧ろ冷たさである。空腹を感じたので持參の辨當の外に野趣豊かなオムレッツを作らせて二皿まで平げる到底もの味加減である。

聞けば九月に入つてからのメザンク登山は無理なんだ相で、到底も非度い霧である。落着いた氣分で見物する譯には行かぬ位だが、村の家々はサン・ブリヴァのそれとは大分變つてゐる。第一板狀の響岩を載せた石膏の屋根が低い様であるし、石の壁や石垣等も如何にも仰山らしく見える。秋から冬へかけての氣候の峻嚴さが讀取れる様な氣がする。

裾野の生業は殆んど全部牧畜らしい。此所の氣候は農耕を許さないのである。牛が多く矮草を食んで居る。フォノライト (phonolithe) の岩塊がごろ／＼する草地に。

裾野は然し草地ばかりではない。名を知らぬ針葉樹の林もある。大體草地と灌木林と針葉樹林とからなつて居ると云へよう。

何と云ふ霧だらう。御互の姿を見失ふ程ではないとしても眺望は少しも利かぬ。第一メザンクの峯が見えなくては何處へ上つていいのかも解らぬ。五里霧中に小徑のある所を迫るばかりである。草木は霧で雨にでも濡れた様に霑つて

居る。膝から下はずつぱり濡る。婦人連の白靴下は土色に染まつた。何度か引返さうかと思つた。

と僅かの晴れ間、霧の隙間から岩山らしいものが見えた。メザンクの頂である。勇を鼓してそれを目當てにひた登りに登る。漸く登り着いたのは全體が響岩の塊からなるメザンク頂上の避難小屋であつた。眺望は勿論利かぬ、寫眞も駄目である。唯響岩の塊の一つには記念として又標本として思ふ存分採集し得たのみである。こんな時候外れに登山の人士としてはない。淋しく冷い小屋に小憩して元の道を降る。淋しい村の繪端書と摘み取つた名も知らぬ高山植物の花がよき記念とはなつた。

麓のレストランで休息して再び自動車の客となり、ロアール河の水源、ジェルビエー・デ・ジョンク(Le Gerbir des Jongs)を指す。霧は麓では漸く晴れて又捨て難い散歩道であるのを知る。ロアールの水源も、それと知られねば恐らく看落すであらう貧弱な細流である。麓のシャレ

ー附近に車を待たせ、諸嬢を憩はせて置いて、先生と二人で、ジェルビエー・デ・ジョンクの急坂を登る。美しい響岩の山だ。裏の斜面は殊に急崖をなして居る。麓の牧地が起伏して美しい。

山を降りて又車中の人となりイサル湖(Lake Isère) (標高九九七米、周回五軒、深さ一三八米で佛蘭西最深)に至る。此所は可なり賑かな觀光地であるらしく、土産を賣る家や料理店なども見られる。静かな夕方の湖水の景色は又格別である。

湖畔にセルト時代の洞窟があり、現在も住居に利用せられて居る。鎖に傳つて登ると平坦な岩床がありそこが居室に利用せられ此所に簡単な炊事道具や若干の家具類が見られ奥の方は寢室になつて居り、穢ならしい然し古式のバルダカン式の寢臺が二臺ばかり置かれて居る。古い洞窟遺跡が現在も住居に利用せられて居るのは珍らしく、正にグロテスクなものである。唯室内がじめ／＼濕つて居るのは何とはなしに氣持が悪い。特に濕る部分には藁などを敷いて居

るが丁度概にでも居る感じである。

湖水の夕景色を眺めたり清澄な岸の水を掬んだりした後レストランに入りおやつを食つてルビュイへの歸途に就く。

村から崖の下夕景の谷を眺めたこと、暗闇の中から名を知らぬ地方都會の電燈ある街に入り強い好奇心持て車の窓からその軒並をのぞき込んだことなど未だに忘れる事が出来ない。ルビュイを素通りにして九時頃サン・ブリヴァに歸り、一日苦勞を掛けた運轉手君と宿の食事を共にし心附を與へて別れる。自働車賃四百法餘を支拂つたが愉快な一日の清遊であつた。

九月十三日、木曜日、晴。先生、マルセル、メリー兩嬢等と共に徒歩アレイラスに遠足する以前に自動車で通つた道とは全く別の間道である。殆んど人の通行せぬ道らしい。所によつては道なんか無いと思はれる迄に草茫々と茂つて居る。

とある部落と云ふよりは一軒家に出た。丸で鳥が樹に止つた様に險崖の上にある。一體何を

生業として何んな食物を食つて生きて居るのであらうと怪しまれる位である。それよりも第一冬の寒さが思ひやられる。渴を覺えたので中に入り水を求める。御婆さんでもない一人の婦人が居て赤葡萄酒を飲めと勧める。不味いが好意は難有い。そして又た無氣味な食料品を出して來て食べよと勧める。蜂蜜である。これは珍しいと思つた。何れにしても勧められたものを食べなければ氣を悪くすると云ふ。然し餘り澤山食べては腹を損ねると先生は注意せられる。婦人はつく／＼自分を眺めて先生に問ふ。この人はあなたの夫かと。先生は答へて否此の人は日本人だと云ふ。日本人でもよい。日本と云ふのは此の村から大分先きかと云ふ。こんな調子だ日本と云ふ所が佛蘭西の中にあると考へて居る。呑氣な一軒家のおかみさんではある。此所に、も一軒人家があつたらしいが今は廢墟の様に石壁ばかりが残されて居る。

アレイラスへの道なんかあなた方には到底解らぬから子供を案内につけてやると云ふ。厚く

謝し、子供に案内されて此の家を辭す。成る程我々には解り想もない徑ではある。否徑すらない。草木の茂る儘に委せてある。

漸くのことで一小部落に出る。家は多くは石垣を高く積んで作つた傾斜面上の平地にある。一軒の家は小城廓の様にさへ見える。それ程石垣は高いのである。詰り平地が少なく傾斜は急なのである。

村の外れに一軒の機械木挽がある。これだ、純真な自然愛好者を嘆かせるのは。材木が高く賣れるので林の所有者が誘惑せられ美しい松の木などが無慙に伐られて行くと云ふ。此の山奥から材木は段々アレイラスの方へ出されるのである。その爲一部分新道さへ造られたのである。

漸く谷の景色が開けて、行く先の見當も見極めが着いた。少年には御駄賃を與へ厚く御禮を云つて歸つて貰ふ。素直な朴訥な可愛い少年であつた。

川は廣くなる、道は平坦な大通りになる。川を隔てた對岸の山の脊には所々古城砦の石垣が

見える。河を下ると立派な城さへ見える。確かに中央高原風景の特色である。

レストランに中食を頼んで置いて一浴みする人数が少くて淋しい。水も冷い氣がする。泳ぎから上つて中食する。皆んな渴いて少々飲み過ぎた。到底も愉快に諧謔がはずむ。

汽車でモニストロールに歸る。鐵路は大體河に沿つて居る。沿道の谿谷美は又捨て難いものがある。窓外の景色を送送する中に僅かの時間で汽車はモニストロール驛に着く。おやつを食べて徒歩サン・ブリヅァに歸る。少アラン等が途中で迎へに來る。

疲れた時に風呂の無いのは日本人にとつては大なる苦痛である。所がサン・ブリヅァには風呂が無い。マダム・シャンボンの宿にも無ければ、マダム・バリエーの宿にも無い。他の民家には勿論無い。御寺の坊さんは良き葡萄酒を蓄へ靜かに本を読む文化の中心人物であるが、風呂を持たない。我々河に泳ぐ連中は水に漬かり砂でござし、身體を洗ふので氣持はそう悪くはない

が、夏ならばこそである。冬はどうするのか。サン・ブリュッの文化が進んで居ない精であらうかそれとも水の供給が豊富でない爲、水の運搬が容易でない爲でもあらうか。それにしても一生入浴と云ふことをせずにどうしてサン・ブリュッの人達が生きて行けるのであらうか。小さい様だが一つの大きな謎である。

九月十五日、土曜日、晴。先生、マルセル嬢と三人で、ル・ビュイへ行く。先づ乗合自動車でル・ビュイに着き、自動車を備つてレスバリー(Les Bâllies)へ行き、佛蘭西では有名な玄武岩の露頭を見る。その美しい柱状節理の奇観で知られて居る。玄武洞などを見つけた眼にはそう驚くに足らぬが、兎に角佛蘭西では古典的な玄武岩柱状節理の露頭地とせられて居る。大體ル・ビュイを中心とする中央高原の火山地方が佛蘭西の火山學者間には早くから研究の好フィールド、古典的な調査地域となつて居るのであるが俗にレ・ゾルグ(les Orgues)と呼ばれて居る。その形状がオルガン・パイプに似て居るからで

あらう。岩石標本を採集する。

附近に立派な近代式旅館が建築せられつゝある。ル・ビュイ全體が大體景色のいい所である。殊に此の邊の景色つたらない。此所にモダンな氣の利いたホテルの建設は尤もと點頭ける。途をサン・ドゥニーズの火山に採る。St. Denise

の名は舊石器時代の研究殊に古人類の問題に興味を持ち初めた自分には滯佛以來の懐しい名であつた。火山の名としては滯佛以來の懐しい人類遺骸の發見地として。そして今日其れを眼のあたり踏査し得るのである。軽い興奮を覺えない譯に行かぬ。詳しい敘述は此處の火山と遺蹟の研究者、現巴里自然史博物館古生物學研究所長ブールの著書に譲る。(Marcellin Boule, Les-Lommes fossiles, Paris, 1923. — La Haute-Loire et le Haut-Vivaraix, Paris, 1911.) 後者は今日レスバリーを訪れる前ル・ビュイの町の本屋で買ったものであるが、立派な科學的の案内書である。學術的案内書の白眉であらう。此所から發見せられた古人類遺骸はル・ビュイの町の

博物館に保存せられて居て、先達て長尾さん達と一所に悠くりと見た。唯遺蹟そのものがよく保存せられて居ず、徒らに火山礫砂の崩落に委せられ既に埋没せられて居て、現場を眼の邊り見ることを得ないのは残念である。僅かに火山岩の標本を採集し、火口附近に於ける熔岩噴出の跡をスケッチする位で満足しなければならなかつた。遺蹟は大體火山の麓に近い部分にあるが、麓から火口までの高さはそう高くはない。唯火山礫が碌々として居て登り難いだけである。

懐かしいサン・ドゥニーズに別れを告げ、ポリニャックの御寺を訪れる。由緒の古いロマン風の建築である。日本人が訪れたので嬉しいらしく坊さんは到底も親切に案内して下さる。殊に建築の説明つたら専門家はだしである。微に入り細を穿つて居る上に此の視角から見下さいなどと見るべき観點へ連れて行かれる。自分も満更趣味がないことはないで面白く説明を聴く。庫裡まで見せて貰つた。唯説明が長いのでマルセル嬢は閉口の體である。厚く謝して出で、

ポリニャックの城を見る。草茫々と茂つた城壁内の庭、石壁のみ僅かに残る廢墟の葛、何度眺めても唯無量の感慨が起る。本丸ばかりは僅かに手が入れられ舊態を存して居るが、構へはあれど屋根も床も抜けて居る有様である。それ丈け眼下に榮えるル・ビュイの眺めはよい。古井戸がある。井筒の直徑は四米ばかりもある内側には草が茂つて居て水面も低い。妖精でも棲んで居るか。

城内露出の基盤岩石を採集したり寫眞を撮つたりして城外に降り御寺の傍のレストランに渴を醫し、車中の人となつてテルミニユスに至り中食をとる。

先達て博物館では随分立派な此の地特産のダントルの陳列を見せつけられた。又たサン・ミシエルやノートル・ダム附近の婆さん達の手編みを眼の邊り見た。そして此の地の御土産はダントルに限ると迄思つた。店に入ると色々の製品が陳列せられて居る。卓掛け、土瓶敷き、花瓶敷き、壁かけなどの好きなものがある。少し

ばかり御土産を買ふ。

乗合自動車でサン・プリヴァに歸る。ル・ビュイよさらば！

九月十六日、日曜日、晴。サン・プリヴァを去るべき日が來た。せめてもの記念にとて村外れの玄武岩の露頭に至り慾深いまでに多量の岩石標本をとる。先生は墓參りに行かれる。佛蘭西人も仲々先祖を大事にするわいと感心する。

朝から皆の心は淋しいらしい。先生と自分とは巴里に歸る豫定になつて居たから。殊に少アランとその母はもう巴里へは歸らず此處から直接モロッコへ歸ることになつて居るから。肉身の情は嚴然たる世界共通の事實だ。

慌しく荷物を詰めたり近所の人達に別れの辭を述べたり中々に急がしい。バリエー夫妻に別れを告げに行くと一杯飲んで呉れと云ふ。今ま

で代を拂つては飲んだ。今日は少々様子が違ふ別れの杯を交すのが此所の風習らしい。厚意誠に難有く思ふ。

愈々自動車に乗るべき時が來た。永らく主婦として色々世話を焼いて呉れたシャンボン夫人を初め、善良なその主人、小娘、少ビエノル等に別れを告げる。矢張別れの酒を出される。小杯に強い酒を使ふ。面白い習慣だと思ひ、田舎人の敦厚な情けを難有く思つたのであるが、すつかり酔つた。

シャンボン夫人の兄なる人が荷物自動車を運轉して驛まで降りて呉れる。モランジェ家の人達は驛まで見送られる。かくて午後五時五十七分汽車はモニストロール驛を去つて巴里に向つたのである。(昭和六年八月十九日稿了)